

佐太講武貝塚発掘調査報告書

1993年3月

島根県鹿島町教育委員会

さ だ こう ぶ かいづか
佐 太 講 武 貝 塚
発 挖 調 査
報告 書

目 次

例 言

1	I 調査の経過
2	II 位置と歴史的環境
4	III 調査の概要
6	第1調査区
6	第2・3調査区
7	第4調査区
8	第5調査区
11	第6調査区
12	第7調査区
15	第8調査区
16	第9調査区
17	第11調査区
20	第12調査区
20	第13調査区
21	第16調査区
24	第17調査区
25	第18調査区
26	第19調査区
26	第20調査区
27	IV 小 結

例　　言

1. 本書は、鹿島町教育委員会が平成4年度に国庫補助事業として実施した佐太講武具塚の発掘調査の記録である。
2. 調査地所在地と、ご協力いただいた土地所有者のご芳名は以下のとおりである。土地所有者の方々には、この場を借りて厚くお礼申し上げます。(敬称略)

調査区	所 在 地	上 地 所 有 者	調査区	所 在 地	土 地 所 有 者
1	鹿島町大字名分647-2	稲田輝郎	11	鹿島町大字名分741-3	井上三郎
2	〃 1535-2	井上一士	12	〃 741-1	〃
3	〃 1535-2	〃	13	〃 729	青山保久
4	〃 1534-2	中島精三	14	〃 730-1	中島正
5	〃 660-4	鹿島町	15	〃 748	木村嘉季
6	〃 753	安達良一	16	〃 748	〃
7	〃 757	平塚芳三	17	〃 673	鹿島町
8	〃 755	福井勝士	18	〃 660-3	井上正己
9	〃 759	井上和夫	19	〃 660-3	〃
10	〃 1487	木村昭一	20	〃 661-3	武田マス子

(1~14は史跡指定地外、15~20は史跡指定地内の調査区)

3. 調査は平成5年1月27日から平成5年3月26日まで実働43日をかけて実施した。調査体制は以下のとおりである。

事務局	曾田徳 (鹿島町教育委員会教育次長)
	青山俊太郎 (同 社会教育係長)
調査指導	田中義紹 (鳥根大学法文学部教授)
	山本清 (鳥根大学名誉教授)
	石井悠 (鹿島中学校教諭)
	徳岡隆夫 (鳥根大学理学部教授)
	大西郁夫 (鳥根大学理学部教授)
	竹広文明 (鳥根大学汽水城研究センター助手)
	井上貴央 (鳥取大学医学部教授)
	角田健幸 (鳥根県教育庁文化課)
	松村恵司 (文化庁文化財調査官)
	松井章 (奈良國立文化財研究所主任研究官)
調査員	赤沢秀則 (鹿島町教育委員会主任主事)
調査補助員	水口昌郎、岡泰道、石橋淳一、宮田健一
作業員	川下靖夫、井上一郎、新宮嘉夫、平塚芳秋、中島昭雄、近藤一郎、曾田芳子、長堀美江子
遺物整理員	中村暢大、朝山千徳(以上、鹿島町立歴史民俗資料館)、水口晶郎、岡泰道、石橋淳一、宮田健一
4. 報告書の作成にあたっては、出土遺物について(財)大阪文化財センター井上智博氏にご教示をいただいた。

I. 調査の経過

史跡佐太講武貝塚は、昭和 8 年の指定以来現在まで保護されてきたが、指定後調査は行われておらず、貝層の広がり、周辺遺構の状況などは確認されていない。よって、遺跡の正確な範囲、性格等を把握するため、部分的な発掘調査を実施し、遺跡の保護・活用に資する資料を得ることを目的に計画した。また、指定地の中心を県道松江鹿島美保関線が通っているため、近年の交通量の増大に対応できなくなってきた。こうした面からも基礎資料を得る調査が急がれた。

史跡指定地は、大字佐陀宮内と大字名分にまたがる。今回の調査では、大字名分側において指定地および指定地周辺の発掘調査を行い、昭和 8 年の史跡指定以来行われたことのない調査を実施し、貝塚貝層、関連遺構の検出につとめることとした。調査は平成 4 年度の国庫補助事業として、約 204 m² を対象に実施した。

指定地外の部分については、平成 4 年 12 月 25 日付けの発掘調査通知書を提出し、翌 5 年 1 月 27 日調査に着手した。指定地内の調査区については、平成 5 年 1 月 25 日付けで史跡現状変更許可申請書を提出、同年 3 月 1 日付け許可書を文化庁長官から得、調査にいたった。

調査では、貝層分布の中心部と考えられる地点で、貝層の広がりを確認し、精査していたが、調査指導者会の席上、周辺地形および土層の堆積状況から、検出していた貝層は、二次堆積したものではないかとの見解が示され、調査方法を切り替え、史跡指定地内の第 16 調査区で貝層の断ち割りを試みた。その結果、貝は 1 m 以上の厚さで堆積しているものの、粘質土がブロック状に堆積し、貝層相互の間もかなりの間隔を挟む堆積をみせ、貝塚としては不自然な状況を示した。

平行して進めていた第 6 調査区では、貝の下層から赤生土器が出土するおよんで、この付近の貝層は二次堆積によるものであることが確定した。とはいえ、貝層中に含まれる遺物は縄文時代のものに限られ、貝は他の地点から一括して搬入されたことがうかがえた。

よって、貝層はすべて搬出することとし、将来的に水洗選別して資料化することとした。

調査は、冬期の不順な天候のもとで行わざるをえず、困難であったが、3 月 27 日、無事撤収を終了した。



図 1. 鹿島町位置図

II. 位置と歴史的環境

島根半島のはば中ほどに位置する講武盆地は、半島部では持田・川津平野とならぶ広い耕地を持ち、その水田は180haに及ぶ。この盆地は谷奥から流れだす講武川によって運ばれた土砂による沖積地で、肥沃な耕作地となっている。

佐太講武貝塚は、この盆地の西端に位置する。遺跡は江戸時代の運河佐陀川によって分断され、東側が旧講武村、西側が旧佐太村に含まれたことから、佐太講武貝塚と命名された。

この盆地内および鹿島町域内での縄文時代の様子は佐太講武貝塚¹⁾を除いて、いまだよく判明していない面があるが、北講武氏元遺跡²⁾で、後期の土器片少量と晩期系の土器群が出土しており、さらに縄文時代の遺跡が存在するものと考えられる。佐太講武貝塚は、貝の散布範囲が指定を受けているのみで、当時の集落そのものの範囲などはいまだ明らかでない。貝塚を構成する貝は、ほとんどが汽水性のヤマトシジミで占められ、鹹水産のものはわずかである。このことは、この貝塚が形成された当時、この周辺部が潟湖としてこうした貝の成育に適した環境にあったことが知られる。この潟湖は、後の『出雲國風土記』にいうところの「佐陀水海」、「恵巣波」の前身と考えられ、こうした湿地帯からヤマトシジミを主とする魚介類を探取し、周辺の山野に堅果類や鳥獸を求めていたものと思われる。

弥生時代には、先述の北講武氏元遺跡で縄文晩期系の土器と弥生時代前期の土器がともに出土しており、この講武盆地を舞台に初期水田が開発されたことが知られる。また、大字古浦の古浦砂丘遺跡³⁾は、前期の集団墓地が調査されている。盆地西南端にも弥生前期からの佐太前遺跡⁴⁾が存在する。この盆地からは離れるが、「恵巣波」の南岸の山頂には、銅鐸、銅劍を埋納した志谷奥遺跡⁵⁾がある。再び盆地内では、中期の遺物を出土した名分塚田遺跡⁶⁾、四隅突出型墳丘墓の可能性のある南講武小瀬遺跡⁷⁾が知られ、また弥生時代末から古墳時代前期の近畿系の土器が大量に供獻

されていた木棺墓群、南講武草田遺跡⁸⁾が知られていている。

この地が古墳時代を迎えると、名分丸山古墳群⁹⁾、奥才古墳群¹⁰⁾、鶴躑躅山古墳群¹¹⁾など前半期にさかのぼる古墳群が知られ、北講武地区にはこれらに引き続く後半期の古墳が知られてきている。これら以外にも、横穴墓が多數知られており、その分布から古墳時代後期の段階には、現在の集落の原形ができるものと考えられる。

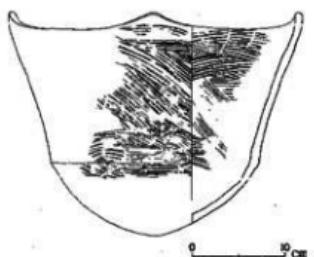


図2. 佐太講武貝塚出土土器

- 佐太講武貝塚
- 古浦砂丘遺跡
- 佐太前遺跡
- 志谷奥遺跡
- 奥才古墳群
- 鶴瀬山古墳群
- 面白古墳群
- 南謙武草田遺跡
- 堀ヶ崎荒神古墳
- 向山古墳
- 中尾谷山古墳群
- 藤山古墳・藤山遺跡
- 細部古墳
- 岩屋古墳
- 多久神社裏古墳群
- 南謙武小郷遺跡
- 北謙武元遺跡
- 南謙武大日遺跡
- 風呂櫻穴群
- 寺の奥櫻穴群
- 寺の奥櫻穴群
- 清水の奥櫻穴群
- 名分櫻田遺跡
- 的松古墳
- 秋葉山古墳群
- 御津中の津古墳
- 御津貝塚櫻穴群
- 御津茅塚櫻穴群
- 名分丸山古墳群
- 氣堀古墳
- 寺尾櫻穴群
- 尾坂古墳群

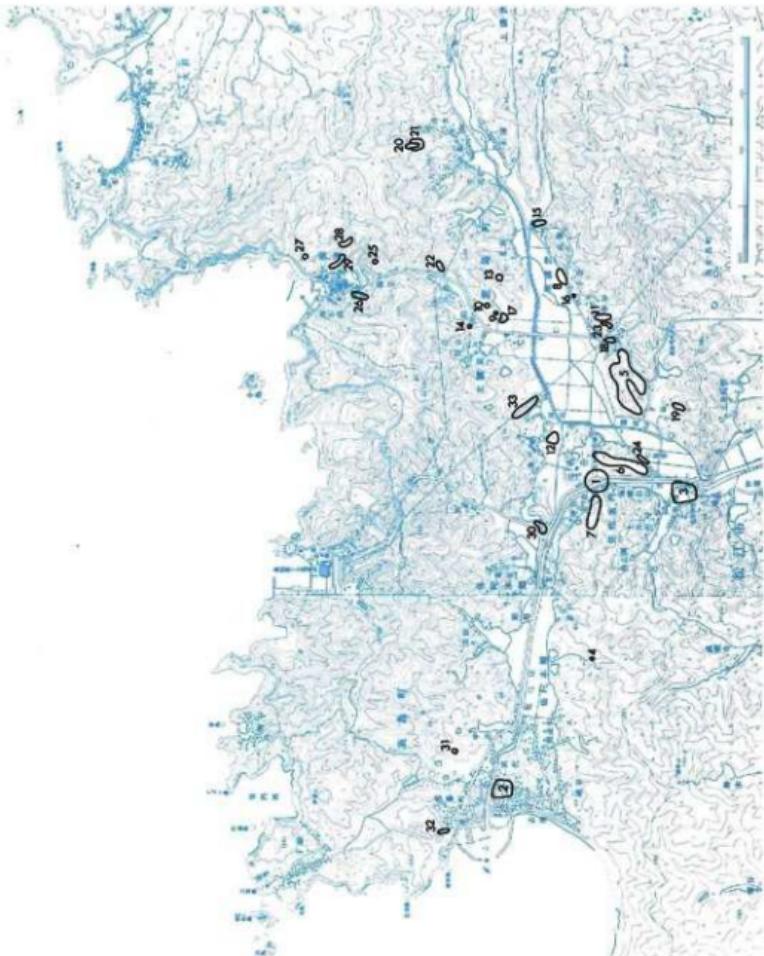


図3. 佐太講武貝塚と周辺の遺跡 (1/50,000)

III. 調査の概要

史跡佐太講武貝塚の調査は、大字佐陀宮内と大字名分に分かれる。今回の調査では、大字名分側において指定地および指定地周辺の発掘調査を行い、昭和8年の史跡指定以来行われたことのない調査を実施し、貝塚貝層、関連遺構の検出につとめることとした。

指定地外の部分については、平成4年12月25日付けの発掘調査通知書を提出し、翌5年1月27日調査に着手した。指定地内の調査区については、平成5年1月25日付けで現状変更許可申請書を提出、同年3月1日付け許可書を文化庁長官から得、調査にいたった。

調査は、指定地外の地点から順次着手した。第1～14調査区が指定地外、第15～20調査区が指定地内の調査区である。調査期間の都合で、当初予定していた第10、14、15調査区の調査は割愛した。

第1～4調査区のある勝間山上の調査区では、中世に山城として削平されているためか、縄文時代の遺構・遺物を検出することはできなかった。通称バクチ谷と呼ばれる谷部に設定した第7、8調査区では、7区で古墳時代前期の堅穴住居、8区で江戸時代にされた運河佐陀川の掃土と考えられる土砂が層厚2mにわたって検出されている。バクチ谷北の鶴瀬山支尾根上に設定した第9調査区では、堅穴住居の可能性がある落ちこみを検出している。鶴瀬山丘陵裾部に設定した第11～13調査区では、弥生時代のものを中心とするピット等が検出されており、遺跡であることの確認はなされたが、佐太講武貝塚に関連する縄文時代の遺構について確認することはできなかった。

ひるがえって、指定地および指定地に隣接する第5、6、15～20調査区では、第5調査区で、縄文時代晚期の土器を包含する貝層を検出した。第6、16調査区では貝層を検出したが、これら貝層はその堆積状況から、縄文時代オリジナルのものではなく、運河佐陀川開削時の土砂移動などの二次的な堆積によるものであることが判明した。このことにより、本来の佐太講武貝塚は、昭和12年前後の佐陀川護岸工事の際に貝層の存在が確認されている佐陀川川中から西岸にかけてその中心部分があることが判明した。

また、第18～20調査区では地表下約1m、標高1m前後に弥生時代後半から古墳時代にかけての包含層があることがわかった。ここでは調査区が狭いため、これ以下については検討できなかったが、第5調査区同様、縄文時代の包含層が存在する可能性はあるものの、貝層は存在しないものと考えられた。

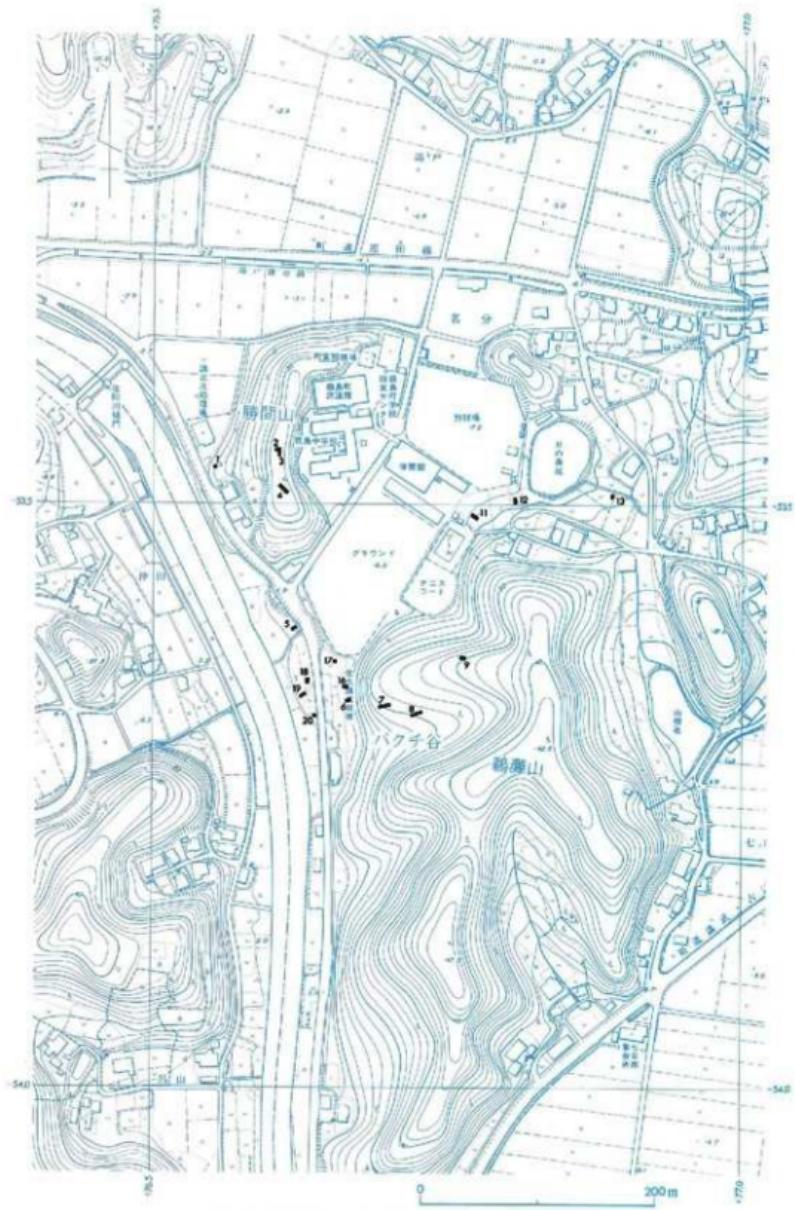


図4. 佐太講武貝塚調査区配置図 (1/5,000)

第1調査区

勝間山北西の裾部に設定した $2 \times 2\text{ m}$ の調査区で、地表の標高は 4.2 m である。付近の水田面との比高は 1.4 m である。

地表下には近年、集落排水処理場が隣接して建設された際のものと考えられる真砂土が約 20 cm の厚さで堆積する。その下部は、江戸時代に掘削された運河佐陀川を掘り上げた際のものと考えられる客土からなり、低湿地に堆積していたと考えられる有機土が主として搬入され、 1.3 m の厚さで堆積している。

旧地表は標高 2.9 m 前後であったと考えられる。標高 2.7 m 前後、地表下約 1.6 m でこの丘陵の基盤層と考えられる黄褐色土層となる。出土遺物はなかった。

第2・3調査区

講武盆地の西を限る鶴瀬山から北西に延びる標高 20 m あまりの丘陵である勝間山の尾根上に $5 \times 2\text{ m}$ の調査区を鏟の手状に設定した。この丘陵は勝間山城として中世の砦跡とされており、丘陵頂部や斜面には郭と考えられる平坦面が散見される。城跡は昭和33～34年の鹿島中学校の造成工事に際してその東側を削られている。

丘陵上の標高 22.1 m の平坦面に設定した調査区で、地表下には茶褐色、淡褐色の地山が風化した土砂が堆積していた。この下、深さ約 0.6 m 前後で、地山面に掘りこまれた不整形な落ちこみを検出した。落ちこみのさしわたしは 2.7 m 、検出面からの深さは 0.4 m である。地山は黄褐色～赤褐色の砂質の粘質土であった。

土層の観察によれば、この落ち込みはピット状の遺構、細長い土坑など、複数の遺構が切りあつたものと考えられる。しかし、いずれの遺構も出土遺物をもたず、時代を特定する特徴をもった遺

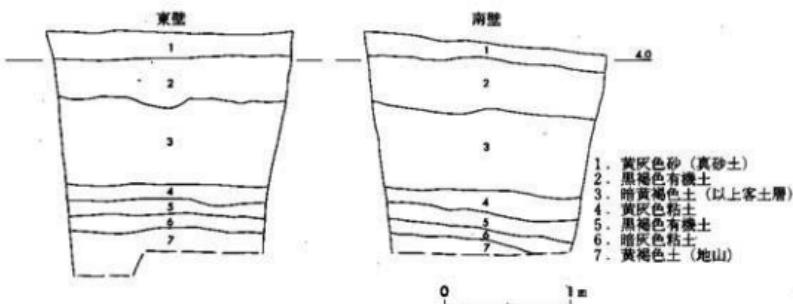


図5. 第1調査区 (1/40)

構でもなく、その時代について検討する材料をもたない。

この中心部分にあった掘り込みは、長辺1.7m、幅0.7m、検出面からの深さ0.35mで、墓壙状を呈する。主軸はN-29°-Eで、墓壙とするならば、

高くなる南側を頭位とするものと考えられる。

壙内の覆土は地山が粉砕された土砂で、掘削から埋め戻されるまでにさほどどの時間は経過していないものと考えられた。

第4調査区

この調査区では、調査前は標高22.6m前後の平坦面となっており、削平されたかのような状況を呈していたが、調査区内では土坑1を検出した。全長は明らかではなかつたが、検出長2.4m、幅0.7m、検出面からの深さ0.6mを測る。

坑壁は垂直に掘り込まれ、底の西部では一部が高く掘り残されており、墓壙と考えられる。この高く掘り残された部分は、遺体を安置する際の枕に相当するものと考えられる。

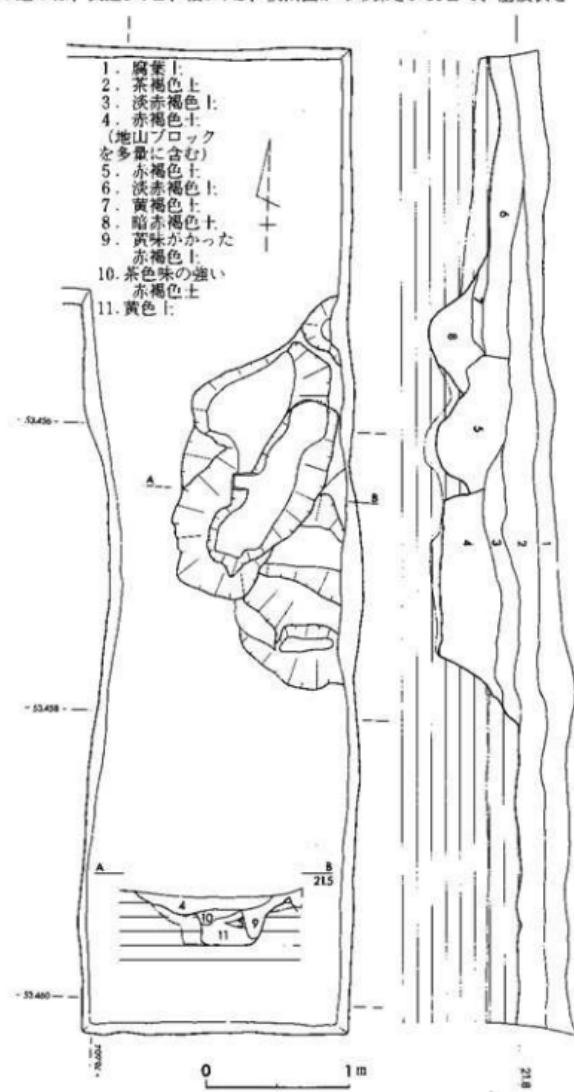


図6. 第2・3調査区 (1/40)

W-9°-Nと、ほぼ東西に主軸をとり、枕部分があるので、西を頭位とするものであろう。垂直に掘り込まれる墓壙壁には、掘削時の工具刃先の痕跡を留めていた。

境内からは、地山の角礫とともに、小片ではあるが須恵器片が出土しており、古墳時代の墓壙の可能性が強い。本来は墳丘をもつ古墳であった可能性があるが、中世の山城として造成される際に削平されている可能性がある。しかし、墓壙の深さが0.6mと一定程度の深さをもつので、それほど大きな地形の改変ではなかったものと考えられる。

墓壙に隣接して2個の浅いピットが検出されている。

第5調査区

佐陀川に面した調査区で、地表面の標高は2.1mであるが、現代の約50cmにわたる客土がなされ、この下層に旧水田耕作土がある。耕作土下には泥炭層が堆積しており、このうち茶褐色有機土、茶褐色粘土層中から縄文土器が出土した。この両層の標高はそれぞれ上面で0.65、-0.05mである。茶褐色有機土は、植物遺体をおびただしく含む層で、木小片、クルミ殻などを多く含むことが注意された。

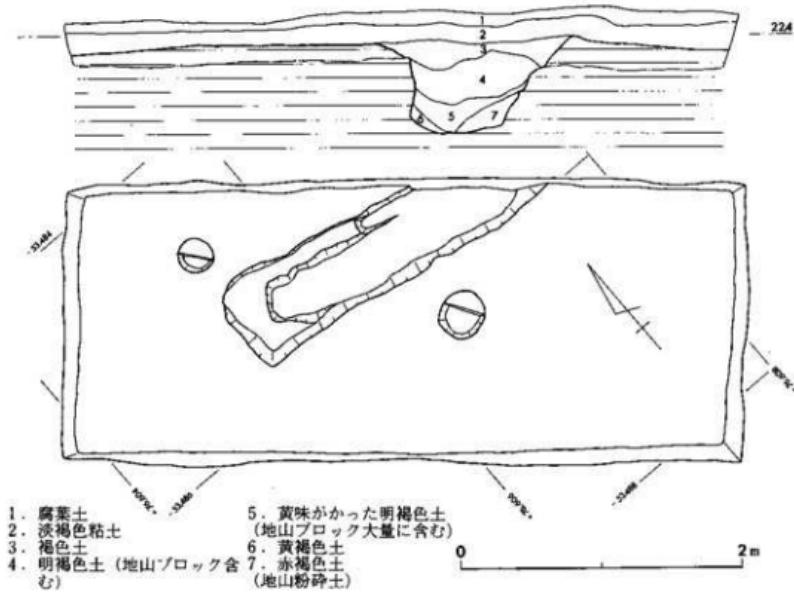


図7. 第4調査区 (1/40)

出土遺物には、縄文土器3個体、木製品がある。縄文土器1は口径27cm、器高20.7cm、底径6.1cmを測る深鉢形の土器で、小さいものながら平底の底部をもっている。外面は左上がりのケズリを施している。暗褐色を呈し、外面に炭化物が付着する。2は口径19.5cmに復元できるやや小形のもので、器壁は薄く、やはり外面は左上がりのケズリで仕上げられる。口縁端部はなでて平坦面とする。暗灰色～灰白色を呈し、外面に炭化物が付着する。3は内外面とも条痕で器壁を調整し、下半

1. 赤褐色土
2. 黄色土
3. 黄灰色土
4. 黄白色土
(以上8層)
5. 茶褐色粘土(旧耕作土)
6. 灰褐色粘土
7. 灰色粘土
8. 灰褐色粘土
9. 褐色斑のある灰色粘土
10. 暗灰白色粘土
11. 淡灰褐色有機土
12. 茶褐色有機土
13. 淡茶褐色有機質粘土
14. 茶褐色粘土

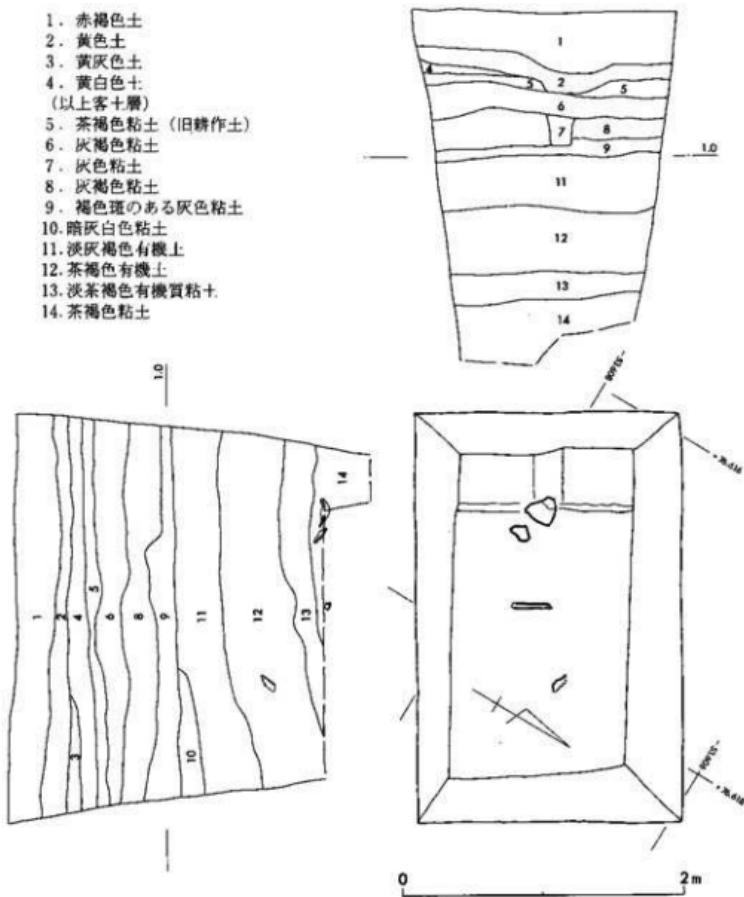


図8. 第5調査区 (1/40)

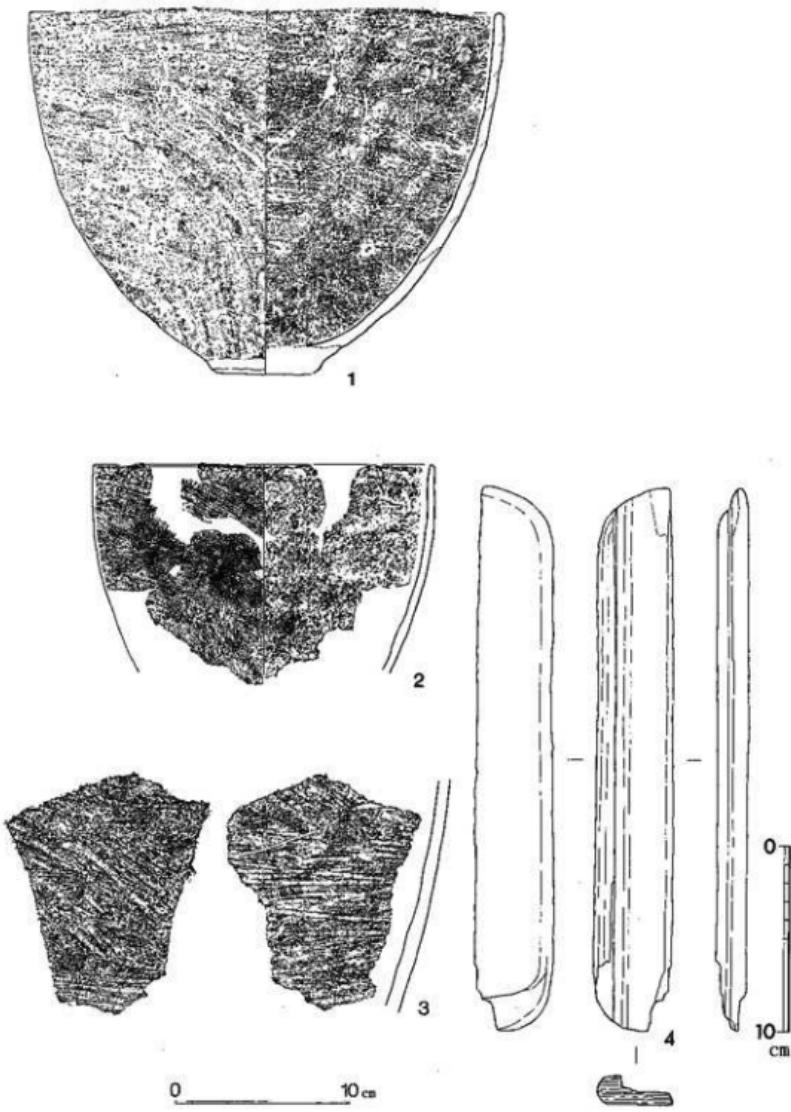


図9. 第5調査区出土遺物

には巻貝の条痕をとどめている。暗灰色～灰白色を呈し、炭化物の付着は認められない。出土した土器は、平底をもつこと、ケズリ技法や巻貝条痕の存在から、縄文時代晚期の粗製土器と考えられる。

木製品4は長さ29.2cm、幅4.0cm、厚さ0.7～1.6cmを測る。長辺の一端が高く縁となって削り残されている。

第6調査区

佐陀川に面した低湿地がゆるやかな傾斜をもって立上り、鶴瀬山に接する付近に設定した調査区で、背後には丘陵崖面が迫っている。

この調査区では貝層が散在的に検出されており、貝層1～4とした。貝層は、いずれも粘質土、貝を包含する黒色土など多様な土層がそれぞれブロック状に堆積する中にあり、自然な状態で堆積したものとは考えがたく、佐陀川開削時の揚土と考えられた。この貝層を除去した下層から弥生土器が出土するに及んで、貝層を含む土層が二次堆積であることが確定した。

この調査区の貝は、そのほとんどがヤマトシジミからなり、海水産の貝はごく少量にすぎない。貝層中からは、シカ、イノシシなどの歯骨のほか、縄文土器、石器が出土しており、縄文時代以外の所産と考えられる遺物は混えてはいないことから、この貝層は2次的な移動を受けてはいるものの、本来の地点で貝塚を構成していたものが一括してこの地点に運ばれたものと考えられる。

出土遺物についてみると、5～7は条痕文をもつ縄文土器である。このうち5は口縁部を外方に折り曲げ、暗褐色を呈し、胎土はやや砂質のものである。6、7は口唇に刻みを有するものである。7の刻みは比較的小さく、外面に4段の爪形の刺突文をもつ。8も7同様、口縁端部に小さい刻み、外面に爪形の刺突文をもつが、口縁部に縦に貼り付けた突帯がある。9は深鉢の下半部の破片と考えられ、外面には縄文をとどめる。内面はなでて仕上げる。10は黒曜石の石錐で、先端部を欠いている。11は、黒褐色を呈する石材で作られた石匕で、背面に大きい剥離面をもつ。刃部は腹面のみを調整している。

出土土器は、従来この貝塚で採集されていた遺物と一致し、近畿地方の北白川下層I式¹²⁾に併行する資料と考えられる。

12、13が貝層下から出土した弥生土器である。12、13はそれぞれ弥生前期と同後期の甕である。12は口縁を外方に折り曲げたもので、大粒の砂粒を含む。13は複合口縁をもつや小形の甕である。これら弥生土器は貝層下で出土していることから、本来の堆積地では貝層の上部にあったものと考えられ、掘削が貝層に及ぶ以前に移動、搬入されたものと考えられる。

第7調査区

通称バクチ谷と呼ばれる谷の入り口近くに設定した10×2mの調査区で、周辺はゆるやかな傾斜をもって西に降っている。

- 茶褐色土
 - 淡褐色土
 - 灰色粘土
 - 赤褐色砂
 - 黑褐色有機土
 - 青灰白色粘土
 - 綠灰白色粘土
斜線は貝層

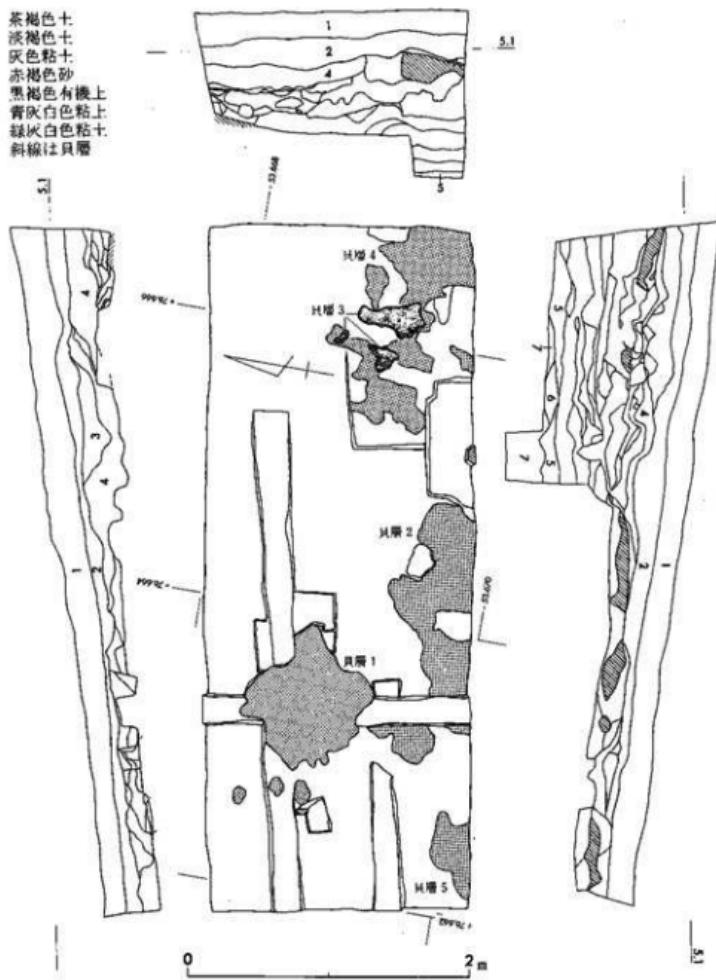


図10. 第6調査区 (1/40)

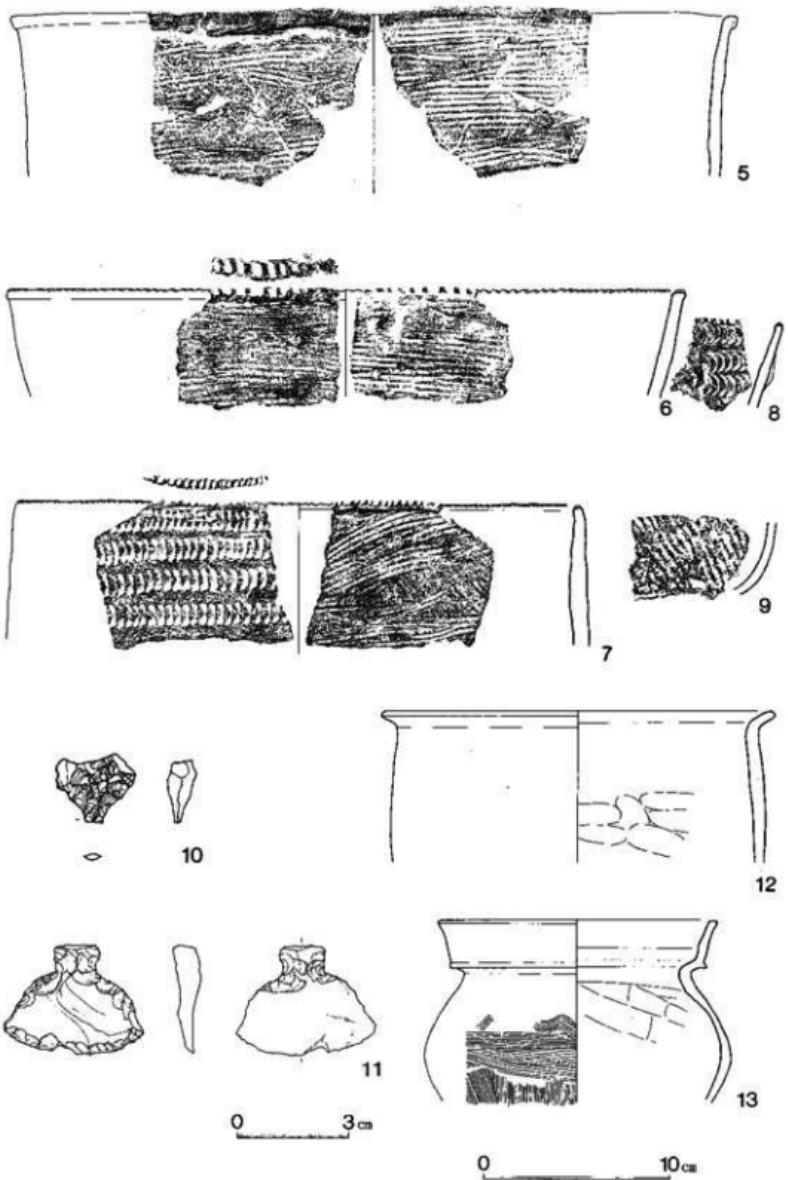


図11. 第6調査区出土遺物

調査区の東半で堅穴住居址を検出した（SBO1）。住居は東側の丘陵に近い部分に壁が残存し、ここで床までの深さ0.3mを測る。調査区内では住居の東南の隅を検出しており、隅丸の方形プランを呈するものと考えられる。住居址西辺は土砂が流出しており、確認できなかった。床面には柱穴、焼土面、炭化物の集中する部分がある。

この住居址内には、石材が投げ込まれたかのような状態で出土している。これらの石材に伴うように土器器が出土している。この土器が住居址の年代に近いものと考えうれば、住居は古墳時代前半のものと考えられる。

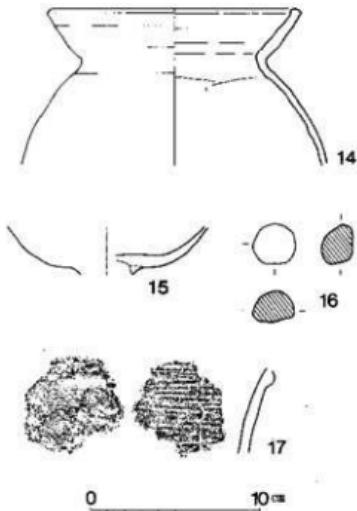


図13. 第7調査区出土遺物 (1/3)

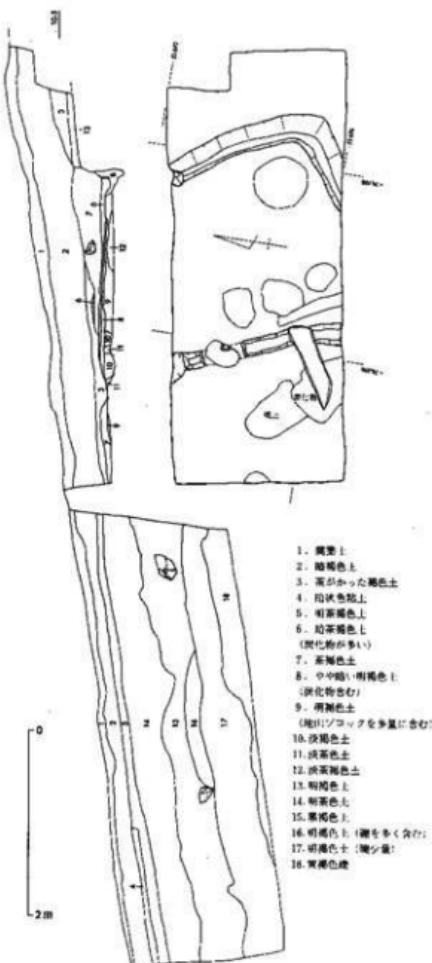


図12. 第7調査区 (1/60)

土師器14は単純口縁の甕、その口縁は内側に肥厚するいわゆる布留式の甕である。15は高杯、16は土玉である。土玉の径は2.5cm、重さ約10gを測る。17は調査区上層からの出土で、口縁下に突帯をもつ縄文晩期の深鉢口縁部と考えられる。

調査区西半では、住居址等の遺構が認められなかったため、土層を断ち割り、下層の堆積状況を調査した。ここでは地表近くに明茶色土層があり、これは竪穴住居を建てる際の造成上と考えられる。この下層では、遺物を含まず、地表から1.9mで地山と考えられる最下層の黄褐色礫層にいたる。

第8調査区

通称バクチ谷と呼ばれる谷のかなり奥部に設定した 10×2 mの調査区で、標高13.8mの地表から深さ約2mまでが客土であった。客土は、いずれも非常に軟質な粘質土からなり、有機土を混えるなど、低湿地から搬入された土砂であり、佐陀川開削時の揚土と考えられた。今回調査を実施した付近は、佐陀川開削工事にあたっては軟質な土壤のため、崩壊を繰り返した崩落の難工事として伝承が残っており、そうした土砂の廃棄場所としてわざわざ数百m離れた谷奥まで運んだものと考えられる。

この地点で注目されたのは、土層断面で旧地表を示す土層が確認できなかっことで、佐陀川掘削以前の耕作土ないし地表土が取り除かれるような土捨て用地の造成が行われている可能性がある。とすれば、佐陀川の掘削事業は伝えられるようなやみくもな突貫工事ではなく、非常に計画性

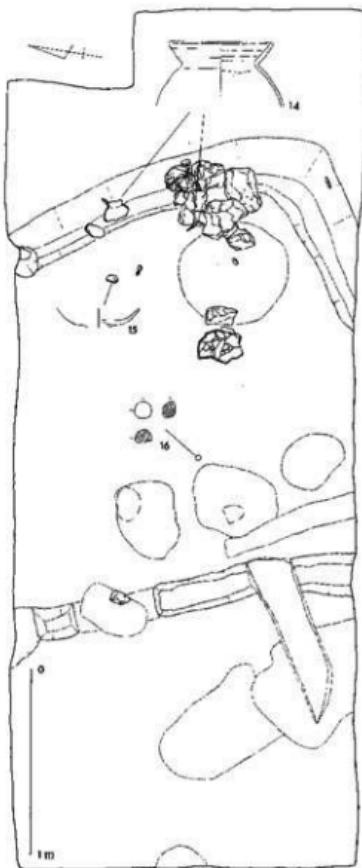


図14. 第7調査区S B01遺物出土状況 (1/30)

のある工事であったことが考えられる。また、同じバクチ谷に位置しながら、平地部に近い第7調査区では、客土がまったく認められないことから、この谷の中でも崩壊のおそれのまったくない奥部を堆土の捨て場としているようである。

この搬入された土砂の中から1点だけではあるが、縄文土器18が出土した。キャリバー状の口縁部をもち、径32cmに復元できる口縁は波状になるもので、口縁、体部とも外面には全面に縄文を施した後、細い貼付凸帯を付け、その上面には刻みが施される。口縁の内面には段状の縄文帯がある。口縁上面は平坦な面をつくり、この面にも爪形の刻みを施す。外面および内面の口縁付近には厚く炭化物が付着する。

縄文時代前末期の里木I式¹³⁾の土器と考えられ、從来知られる前期初頭を中心をもつこの貝塚の遺物とは時期を異にする遺物である。

この時期の包含層も現佐の佐陀川周辺に埋蔵されているものと考えられる。

第9調査区

バクチ谷北の尾根上に設定した調査区で、丘陵がゆるやかな傾斜で降ってゆく地点にある。この調査区では、調査区隅に円弧を描く落ち込みが検出された。一見堅穴住居状を呈するが、覆土が非常に軟質である、炭化物がまったく認められないなどの点から、堅穴住居址とするには躊躇される遺構である。

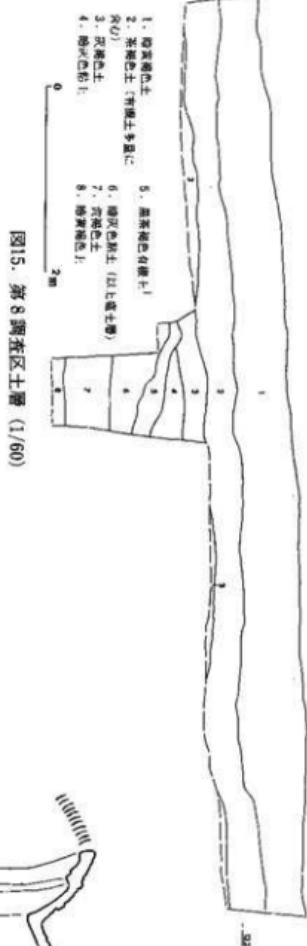


図15. 第8調査区土層(1/60)

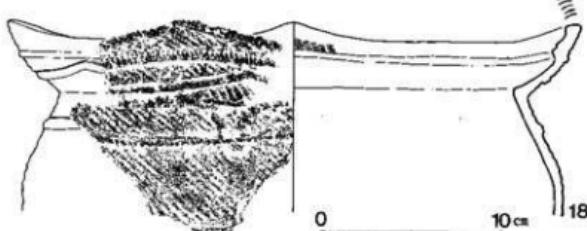


図16. 第8調査区出土遺物 (1/3)

第11調査区

鶴ヶ嶺山の北西の裾部斜面に設定した調査区で、現在は畑として耕作されているが、表土が除去されている模様で、耕作土直下がすぐに遺物包含層となっている。この包含層は、弥生時代の遺物を含んでおり、遺構としては土坑2を検出した。土坑1（SK01）は径0.6m、検出面からの深さ0.5

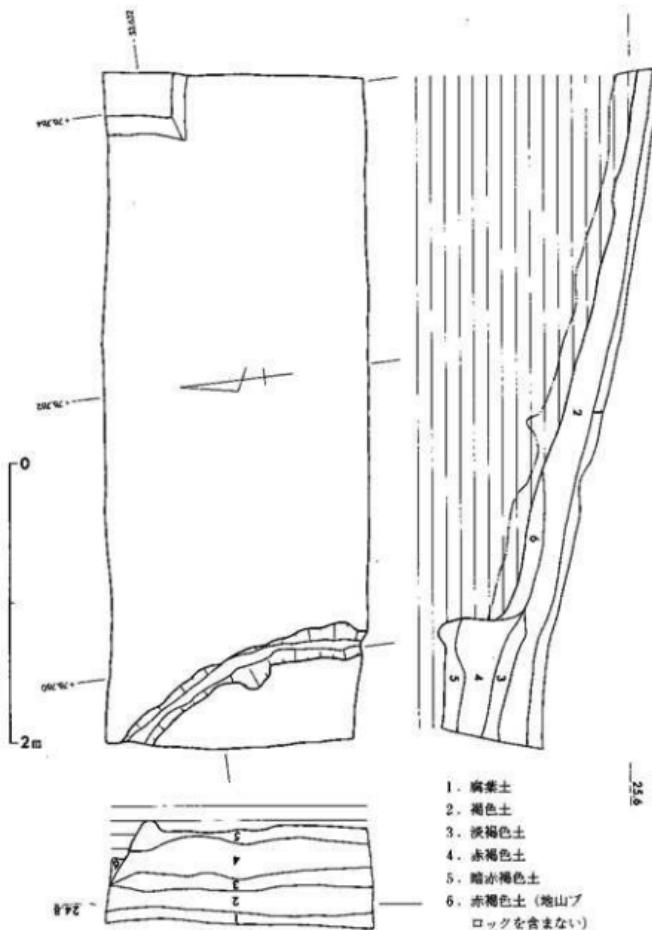


図17. 第9調査区 (1/40)

を測るもので、坑底に円形のくぼみが認められることから、柱穴と考えられる。非常にしっかりした掘り方をもつことから、掘立柱建物の柱穴の可能性も考えられる。穴内には包含層と同様の暗褐色土を基調として同系の土砂が瓦層状に堆積している。土坑2（SK02）はやや浅いすり鉢状のピットである。この包含層の下には暗褐色の層が認められたが、無遺物層のようであった。

ここから出土した遺物は、弥生土器で、19、20は前期の壺で、19外面には羽状の刺突文、頸

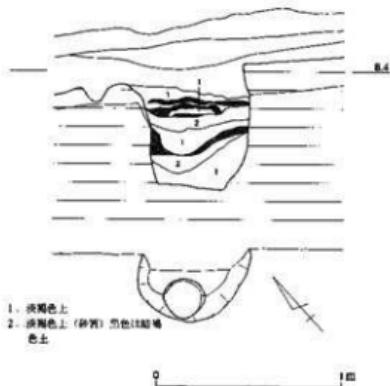


図18. 第11調査区 SK01 (1/30)

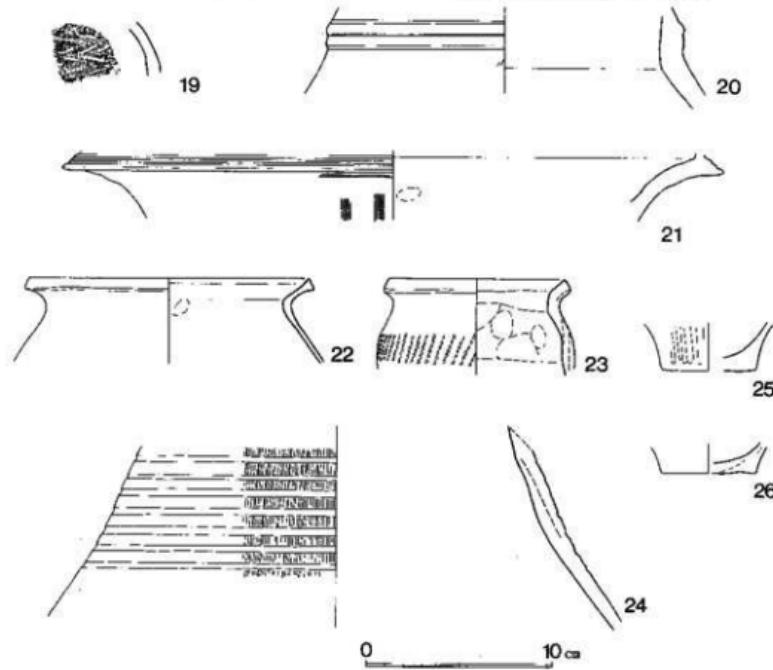


図19. 第11調査区出土遺物 (1/3)

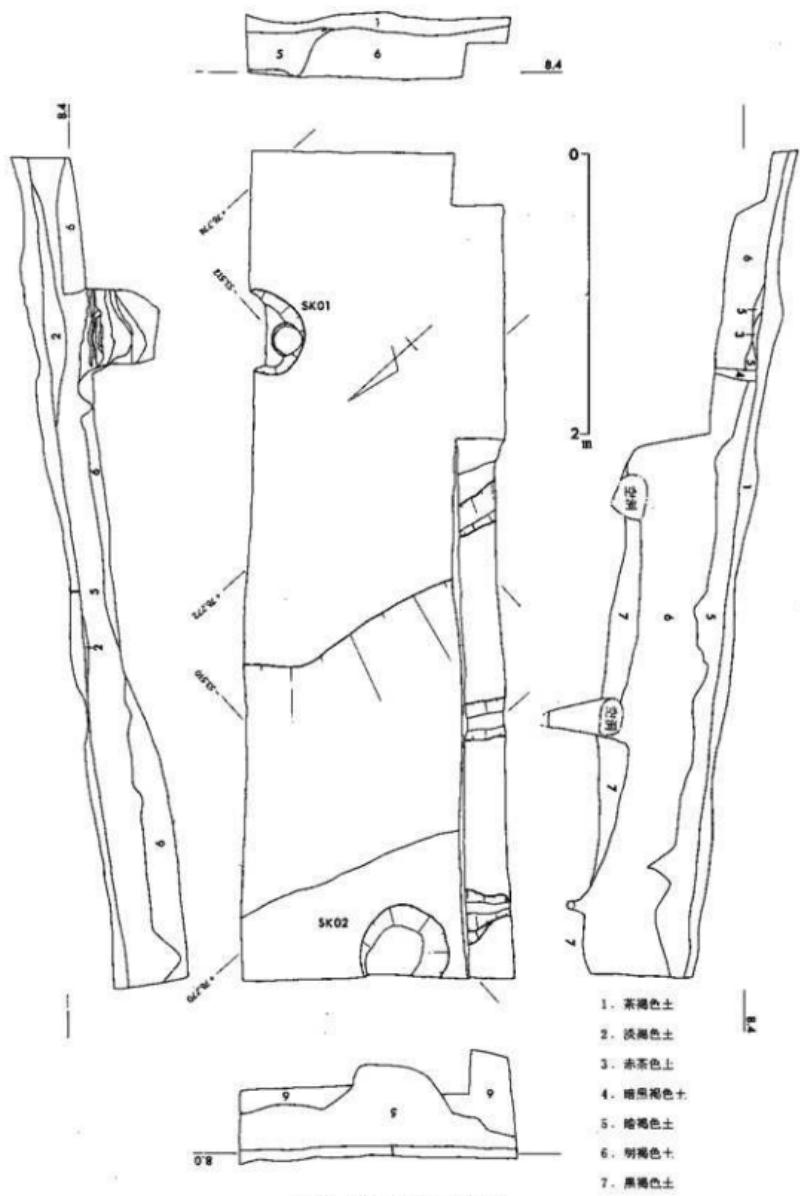


图20. 第11调查区 (1/40)

部20にはけずり出しの突帯がある。21、22はそれぞれ中期の壺と甕と考えられる。23も同時期の小壺であろう。24は中期から後期にかけての壺頸部、25、26も同時期の底部と考えられる。

第12調査区

北東に降るゆるやかな斜面に設定した調査区で、第11調査区同様、表土は除去されており、耕作土下はすぐに赤褐色粘質土の地山になっている。調査区西辺に沿って2個のピットを検出している。南側のピットは平面円形を呈するもので、柱痕跡をとどめる。直径33cm、深さ50cm、柱径は15cmである。第11調査区同様、この付近にも掘立柱建物が建っていた可能性がある。北側のピットは、長辺73cmの方形のもので、深さ15~30cmとやや浅い。

この調査区からの出土遺物はなかった。

第13調査区

北西向きの緩斜面に設定した調査区で、地表下0.3~0.5mに、灰茶褐色土があり、この層中には、弥生時代後期を中心をもつと考えられる遺物の包含層となっていた。

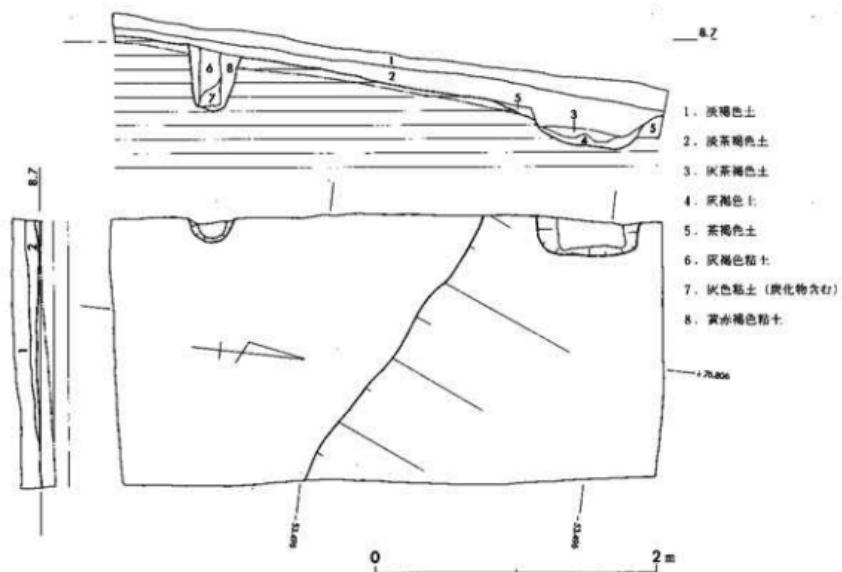


図21. 第12調査区 (1/40)

灰茶褐色土層中には炭化物を多く含む部分も認められ、何らかの遺構であることはまちがいのないところであろう。この層はさらに落ち込み、上面で確認できた範囲では、溝状を呈している。北辺のサブトレンチではピットが認められた。

この調査区からの出土遺物は、弥生土器27、石器28がある。27は弥生時代後期の複合口縁の甕、28は磨石で、火を受けた痕跡がある。

第16調査区

第6調査区に隣接するようになして設定した調査区で、ここでは耕作土の下から、調査区全面にわたって貝層であった。しかし、第6調査区同様、粘質土、貝を含む黒色土など多様な土層がブロック状に堆積しており、ここでも自然な状態で堆積したものとは考えがたく、佐陀川開削時の揚土による2次堆積と考えられた。ここでの擬似貝層の厚さは1.1mにおよぶ。

ここでも貝はほとんどがヤマトシジミからなり、海水産の貝はごく少量にすぎない。貝層中には縄文時代以外の遺物を混えないこと

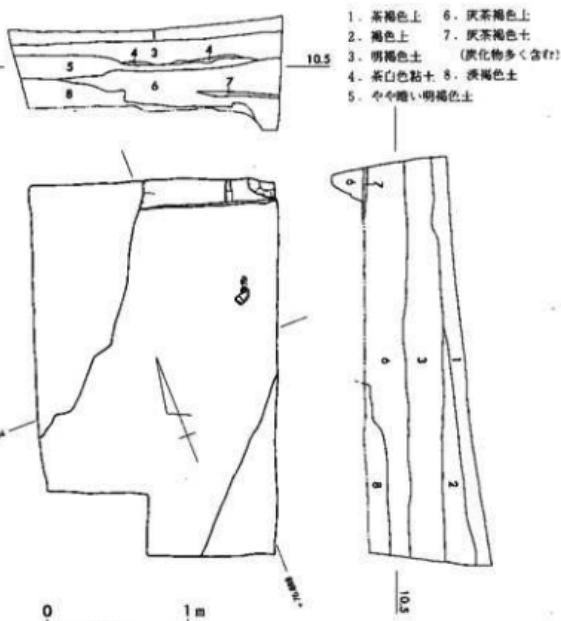


図22. 第13調査区 (1/40)

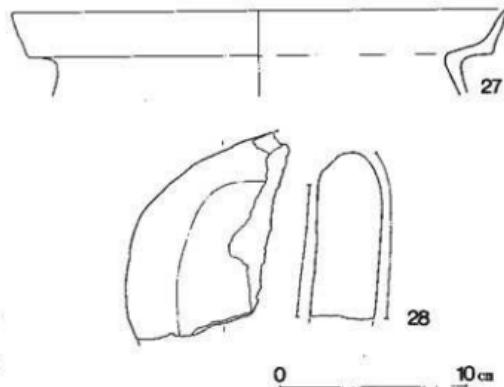


図23. 第13調査区出土遺物 (1/3)

から、貝塚を構成していたものが一括してこの地点へ運ばれたものと考えられる。貝層下の黄褐色砂質粘土、暗灰色粘土はほぼ水平な堆積をもち、また土層に乱れがないことから、佐陀川開削以前の層と考えられる。ただし、調査区西辺沿いの貝層直下の暗灰色粘土は、高く積み上げられたかのような状況を示し、貝を搬入するにあたって土手状のものを築いていた可能性がある。

出土遺物には縄文土器、石器、块状耳飾がある。縄文土器29~31は内外面とも条痕をとどめるも

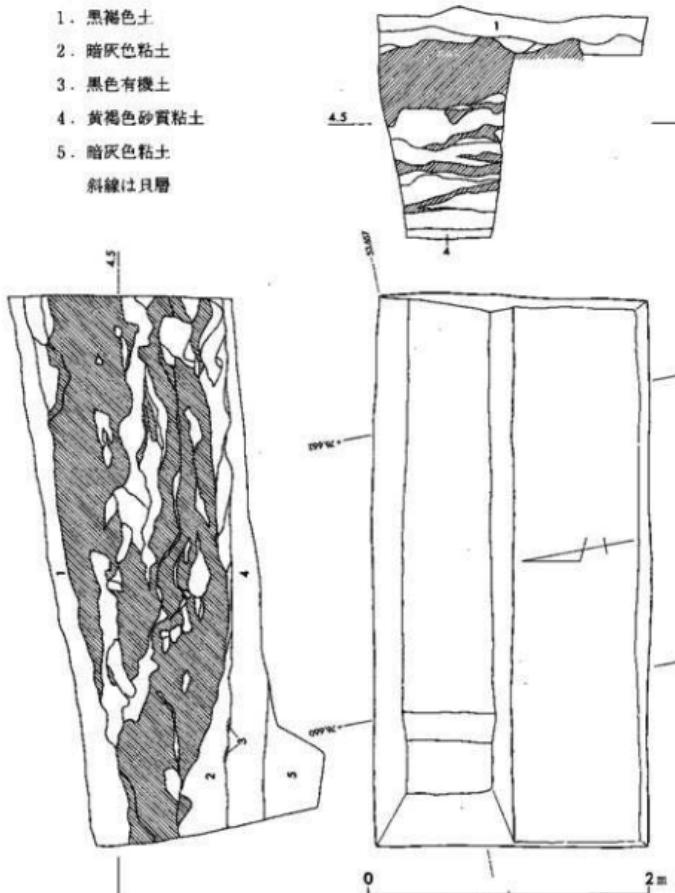


図24. 第16調査区 (1/40)

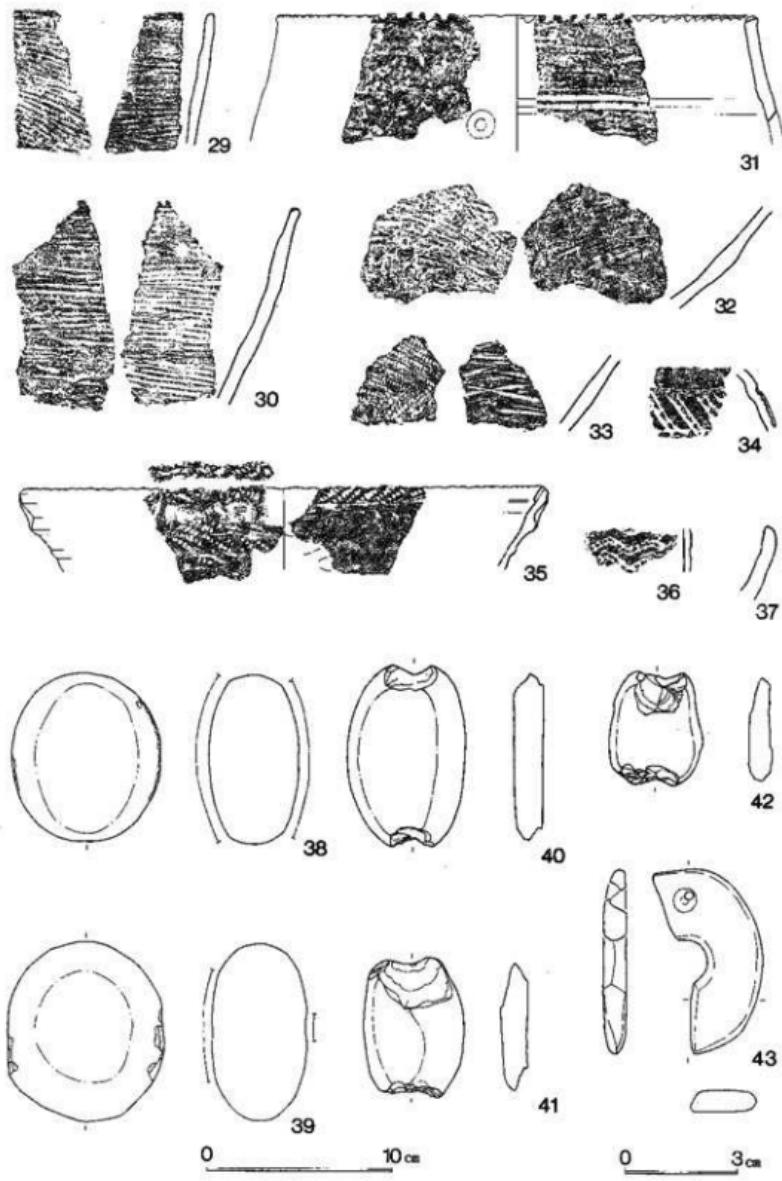


図25. 第16調査区出土遺物

ので、30・31は口唇部に刻みがある。31には補修孔と考えられる焼成後の穿孔がある。32はこういったものの底部近くであろう。これらは近畿北白川下層Ⅰ式に併行する資料であろう。33は外面に羽状の繩文、内面に条痕をとどめ、34・36は薄手の土器片で、外面に押し引きの弦線をもつ。34の内面には指頭圧痕がのこり、山陽地方でいう彦崎Z1式¹⁴⁾の資料である。35は外面全面に繩

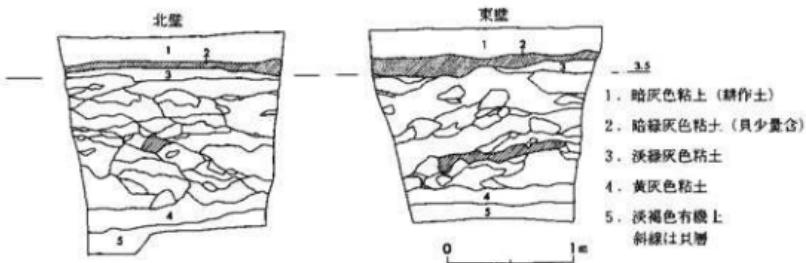


図26. 第17調査区 (1/40)

文を施し、外面口縁下に縦に粘土を貼り付け区画している。口縁内面にも段状の繩文帯がある。第8調査区遺物18同様、里木1式の土器であろう。37はやや厚手の口縁部である。

石器38・39は磨石、石錘40～42は両端を打ち欠いたもの。それぞれ重量138、87、52 gを測る。块状耳飾43は、白色の石材によるもので、穿孔は両面から行っている。復元できる平面形は円形(樋口分類C類)¹⁵⁾のと考えられ、長辺4.95 cm、孔側1.52、切目1.92 cmを測る¹⁶⁾ものである。

第17調査区

第16調査区下方の水田中に設定した調査区で、ここでも地表下から1.3 m、標高2.5 mまでは、ブロック状の低湿地に由来する粘質土の堆積が認めら

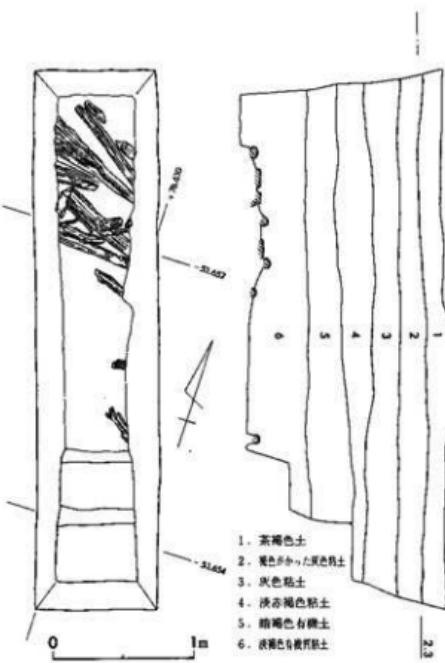


図27. 第18調査区 (1/40)

れ、この地点にも佐陀川の揚土が持ち込まれたことが判明した。耕作土下に薄くと、ブロック状の層中に点々と貝が含まれていたが、その量は少ないと。

ブロック状の土砂の下層は、黄灰色の粘土で、佐陀川掘削以前に存在したと考えられる耕作土に相当する土層は確認されなかった。

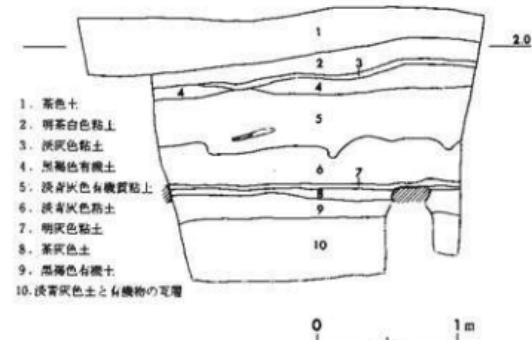


図28. 第19調査区 (1/40)

第18調査区

佐陀川河畔の畠地に設定した調査区で、地表下約1m、標高1.5mに淡褐色有機質粘土が堆積しており、この層中には多く木材が含まれており、加工痕をとどめる木製品と考えられるものも含まれている。これらの木材はそのまま水平に埋没していた。

木製品に伴う土器などは検出しなかったが、同様の層位を呈する第20

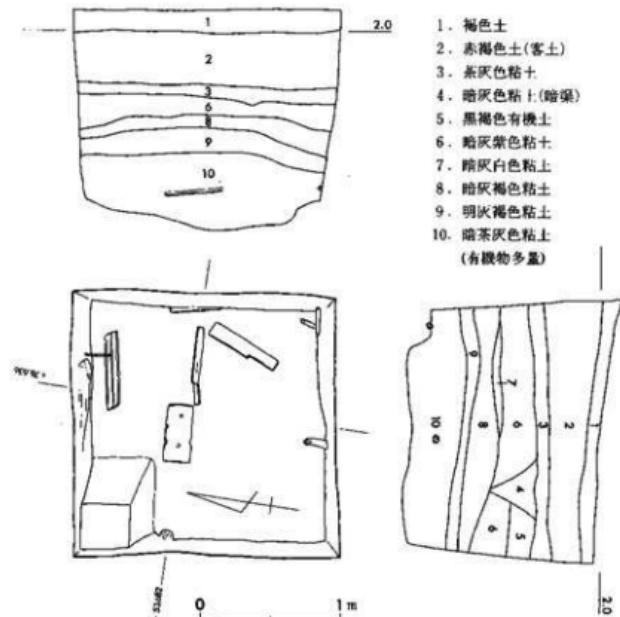


図29. 第20調査区 (1/40)

調査区を参考とするならば、弥生時代後期から古墳時代中期のものと考えられる。

この地点では佐陀川掘削に伴う揚土はまったく検出されなかった。

第19調査区

第18調査区同様の有機土が、標高0.9m以下に堆積しており、この中には径30cm近い太い木材や枕状の木材も含まれており、注目される。

この地点でも佐陀川掘削に伴う揚土は検出されていない。

第20調査区

地表から約0.5mが現代の盛土で、やはり標高1.1m以下に有機物を多量に含む層が存在した。

ここではこの層中に弥生土器、木製品が含まれ、この有機物層の年代が明らかになった。この調査区でも佐陀川の揚土が撒入された様子はない。

土器44は鼓形器台筒部で、弥生時代後期後半のものであろう。低脚杯45は古墳時代前期、高杯46は古墳時代中期頃のものと考えられる。板状の木製品47は、2個の方形の穿孔があり、両長辺に沿っても加工痕をとどめる。



44

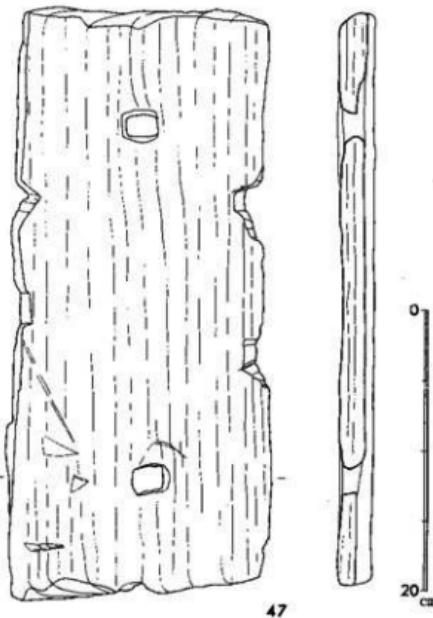


45



46

0 10 cm



47



図30. 第20調査区出土遺物

IV. 小 結

今回の調査では、史跡指定地周辺および指定地内の調査ではあったが、佐太講武貝塚に関わる遺構が発見できたのは、数個所にとどまり、古くから史跡指定地として指定を受けてきた大字名分側の地点は佐陀川開削時の揚土場であることが明らかとなり、周辺部の調査においても縄文時代に直結する遺構、遺物の検出は必ずしもはかばかしいものではなかった。しかし、この調査により、貝塚の中心部分は、昭和12年前後の佐陀川護岸工事に際して貝層の存在が確認されている佐陀川川中から西岸にかけての大字佐陀宮内側に存在することが消去法によるものではあるが、明らかになってきたといえよう。

ただ、各調査区が狭いため、深く調査できなかった地点が数多くあり、比較的浅いところに弥生時代の遺物包含層があることもあわせ考えると、縄文時代の包含層はさらに深い地点に埋没している可能性も考えられることは確認しておく必要があろう。

また、佐陀川東岸、第5調査区で縄文時代晩期の包含層を確認したことにより、わずかな出土ではあるが、第7調査区の突帯文土器、第11調査区の弥生前期の上器をあわせ考えれば、縄文晩期から弥生時代初頭にかけて、付近で集落の成立が知られ、やはり第11調査区の弥生中期の遺物が示すようにその集落は周辺を水田可耕地を拡大していくものと考えられる。また、佐陀川対岸でも弥生時代前期の遺物の出土をみているので、その集落は東岸にとどまらないものであった可能性すら考えられる。

今回検出した擬似貝層中からは、從来数多く採集されていた条痕をもち爪形の刺突文をもつ土器を中心しながらも、彦崎ZI式、里木式の遺物が出土しており、以前に採集されている磯の森式の土器もあわせ考えるならば、この貝塚の時代は、縄文時代前期を通じてのものである可能性も考えられるようになった。

また、移動されたものとはいえ、検出した貝は縄文時代の所産であることはまちがいなく、今後の水洗選別作業によって、より豊かな当時の情報がもたらされることが期待できる。

今回の結果から、1787（天明7）年に開通した佐陀川掘削の際の揚土は、川の東岸では現在の県道以東に盛土されていることがあきらかになった。また、盛土にあたっては、貝塚の貝は意図的に第6、16調査区周辺にまとめられたことも明らかにできた。貝がまとめられたことにより、後世貝塚として認識され、指定につながっていったものと考えられる。

また、調査地周辺は軟質な土壤のため、佐陀川の開削にあたっては崩壊を繰り返した‘鶴源の難工事’として伝承が残っており、そうした土砂の廃棄場所としてわざわざ数百m離れた谷奥まで運んだことが第8調査区で明らかになった。さらに、盛土された各調査区とも旧地表を示す土層が確

認できており、佐陀川掘削以前の耕作土ないし地表土が取り除かれるような土捨て用地の造成が行われている可能性もある。とすれば、佐陀川の掘削事業は伝えられるようなやみくもな突貫工事ではなく、非常に計画性のある工事であったことが考えられる。

今回の調査では、佐太講武貝塚を対象に行ったものではあるが、縄文時代にとどまらず、弥生時代から近世にいたる様々な大地に刻み込まれた痕跡が明らかになるところとなり、周辺地域の歴史の深さを狭い調査区からではあるが垣間みるところとなった。

本来の貝塚の姿、貝塚を形作った人々の生活址の検出など、今後に残された課題も多いことを確認して結びとする。

注

1. 山本 清「佐太講武貝塚」(講武村誌) 講武村誌刊行会 1955年)
2. 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡」鹿島町教育委員会 1989年
3. 金関丈夫「島根県八束郡古浦遺跡」(『日本考古学年報』16 1963年)
- 藤田 等「島根県 古浦遺跡」(『探訪弥生の遺跡 西日本編』 1987年)
4. 山本 清「佐太橋付近の弥生式遺跡」(講武村誌) 講武村誌刊行会 1955年)
5. 「志谷奥遺跡」鹿島町教育委員会 1976年
6. 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書1 名分塚田遺跡」鹿島町教育委員会 1984年
- 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書3 名分塚田遺跡2』鹿島町教育委員会 1987年
7. 「南講武小船遺跡」(鹿島町埋蔵文化財緊急調査報告書1) 鹿島町教育委員会 1986年)
8. 「講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡」鹿島町教育委員会 1992年
9. 「名分丸山古墳群測量調査報告書」鹿島町教育委員会 1984年
10. 「奥才古墳群」鹿島町教育委員会 1985年
11. 「香田考古」16 島根大学考古学研究会 1983年
12. 桑谷克彦「北白川下層式土器様式」(『縄文土器大観』1 1989年)
13. 間壁忠彦・間壁蘋子「里木貝塚」(『倉敷考古館研究集報』7 1971年)
14. 注13書
15. 橋口清之「块状耳飾考」(『考古学雑誌』23-1・2 1933年)
16. 藤田富士夫「块状耳飾の編年に関する一試論」(『北陸の考古学』 1983年)

図 版



遺跡周辺航空写真（白丸が佐太講武貝塚）



遺跡周辺航空写真



第1調査区



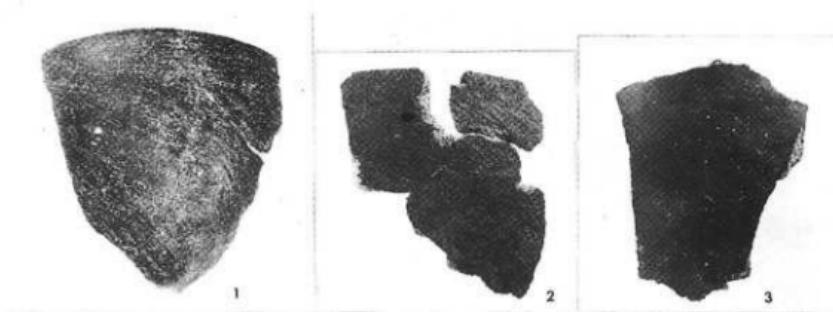
第2・3調査区基壙状造溝



第4調査区基壙



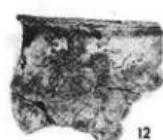
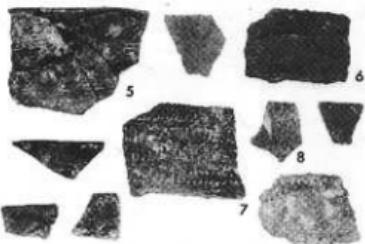
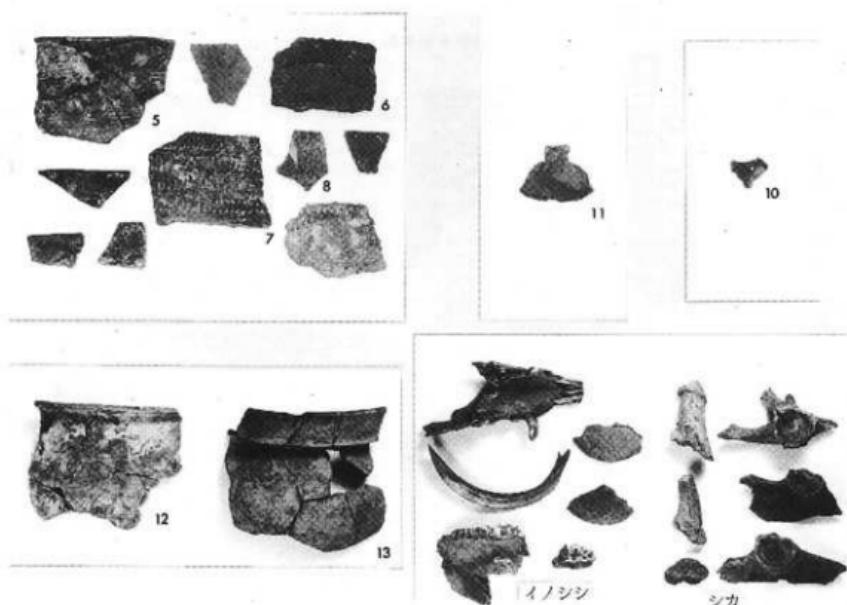
第5調査区



第5調査区出土遺物



第6調査区



イノシシ



シカ

第6調査区出土遺物



第7調査区
堅穴住居
出土遺物



第8調査区



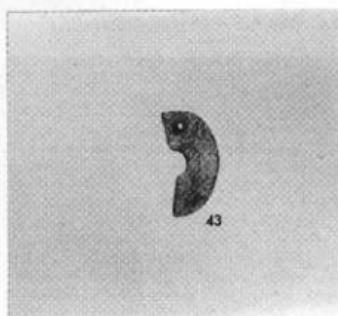
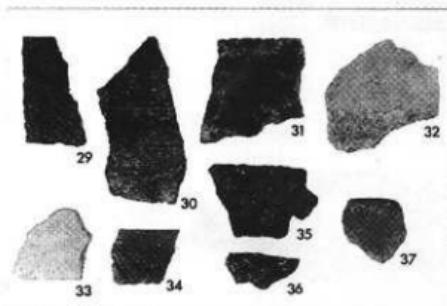
第8調査区出土遺物



第9調査区



第16調査区



第16調査区出土遺物



第17調査区



第18調査区



第20調査区

佐太講武貝塚発掘調査報告書

1993年3月

発行 鹿島町教育委員会
島根県八束郡鹿島町大字佐陀本郷640-1

印刷 柏木印刷有限会社
松江市國屋町452-2